

機関番号：12603

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007年度～2010年度

課題番号：19730457

研究課題名（和文） 幼少期からの記憶の変遷過程：認知発達メカニズムとの関連

研究課題名（英文） Developmental changes in memory during childhood: relations with cognitive development.

研究代表者

上原 泉（UEHARA IZUMI）

東京外国語大学大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：80373059

研究成果の概要（和文）：幼児期健忘（3、4歳以前の出来事を自覚的には思い出すことができないこと）に関して古くから論じられてきたが、そのメカニズムについては明らかではない。研究代表者は、3、4歳頃からの認知発達と、記憶発達、幼児期健忘との関連性を探る調査を行った。その結果、自伝的記憶の発達過程における重要な時期や記憶の変遷過程に個人間で共通性がみられるが、内容量や内容の詳細には個人差がみられることが示された。また、その発達過程における他者からの影響等も示唆され、初期の自伝的記憶の発達過程について複数の視点から解釈や考察を行った。

研究成果の概要（英文）：Although previous studies have argued the causes responsible for “infantile amnesia” --an inability to recall personal events experienced before 3-4 years of age, the mechanisms of the phenomenon remain unclear. The author investigated the relationship among this phenomenon, development of memory and other cognitive abilities in children. The results indicated that there might be critical developmental changes in autobiographical memory common to young children although there might be differences among children in quantity and contents of episodes children could recall. Also, the results suggested that social interaction might have some influences on development of autobiographical memory in children. Based on these results, the author discussed the developmental course of autobiographical memory, metamemory and other cognitive abilities in relation to infantile amnesia.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 1,400,000 | 0 | 1,400,000 |
| 2008年度 | 48,710 | 14,613 | 63,323 |
| 2009年度 | 1,051,290 | 315,387 | 1,366,677 |
| 2010年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,200,000 | 540,000 | 3,740,000 |

研究分野：人文社会

科研費の分科・細目：実験心理学

キーワード：自伝的記憶、ナラティブ、記憶の変遷、認知発達

1. 研究開始当初の背景

（1）従来より、幼児期健忘（Freud, 1901/1960; 自覚的に過去を振り返って個人

的な出来事を思い出そうとしても、3、4歳以前の出来事については思い出すことができないという現象）に関心がよせられ、近年

は、その原因について、主に、語り（ナラティブ）の発達（Nelson, Fivush ら）、自己認識の発達（Howe ら）、心の理論の発達（Perner ら）の視点から論じられてきた。そのうち、幼少期のエピソード・自伝的記憶の発達は、語り（ナラティブ）の能力の発達に依存するという、語り（ナラティブ）の発達説（Nelson, Fivush ら）が有力視されるようになってきた。しかし、彼らの実証的研究では、子どもの幼少時代の母親の過去のエピソードの語り口が、幼少期以降の子どもの過去のエピソード・自伝的記憶の語りの発達に影響を及ぼしているとの知見を中心に、大方、子どもの語り（ナラティブ）の発達に影響を及ぼす諸要因の分析結果が示されており、幼児期健忘が生じるメカニズムに直結するようなデータについては提示されていない。これまで、実証的な知見に基づき、幼児期健忘に関する議論や考察が十分になされてきたとはいいがたかった。

（２）幼児期健忘という現象は、多くの文化圏で成人においてはよく知られているが、国内外で、乳幼児期や児童期の子どもにおける幼児期健忘の実態については、よく知られていなかった。また、幼児期健忘と、エピソード・自伝的記憶以外の記憶も含めた記憶全体の発達過程や諸認知能力の発達過程との関連について、十分に追究されてはこなかった。一方、研究代表者自身の過去のデータから、エピソード・自伝的記憶と関連する認知発達の側面において、３、４歳頃が重要な年齢であることが既に示されつつあった。そこで、研究代表者は、この３、４歳頃の広範囲の認知発達上の変化と、エピソード・自伝的記憶の発達、幼児期健忘との間に関連性があるのかを、縦断的調査法も取り入れて調べることが、当該研究分野の進展にとって重要課題であると考え本研究を計画した。

2. 研究の目的

（１）私たちが幼児期健忘として思い出せる境界年齢、すなわち、３、４歳の前後でエピソード・自伝的記憶がどう変化していくかの変遷過程については、これまで十分に実証的には追究されてこなかった。そこで、本研究では、幼児期のエピソード・自伝的記憶のおおまかな発達の道筋を検討することを目的とした。

（２）エピソード・自伝的記憶の発達変化に関連する諸認知能力の発達過程もあわせて検討することを目的とした。その際、個人内に閉じた発達の变化のみならず、社会性、他者との関係性についても考慮に入れて分析することを目的とした。

（３）個々のエピソード記憶の内容の分析を詳しく行い、長期にわたる個々のエピソードの記憶の変化と、他者との関係性、語り（他者の語り、自らの語りの両方を含める）、他の経験等との関連性を検討し、個人間で共通する変化の部分以外に個人差も含めた、人間の記憶の動的な変化のメカニズムについて追究することを目的とした。

（４）将来的な課題である、子どもの時期から成人期にかけてのエピソード記憶とその語りの変化の過程を探索的にでも追究すべく、成人におけるエピソード等の語りの特徴を、子どもの調査とは別に、予備的に調べることで、子ども時代特有のエピソード・自伝的記憶や語りの特徴を把握することを目的とした。

3. 研究の方法

（１）子どもたちのエピソード・自伝的記憶とその語り方の変遷過程を検討するため、各子どもに、半年程度に１回の頻度で、縦断的にインタビュー調査を行うことで、その変化の過程を追究し続けた。また、インタビュー内で、一部時間をとって、記憶実験も実施してきた。協力者とその保護者の許可を得て、画像や音声を記録した。

（２）認知発達上の詳細の変化を把握することと、子どもたちの語りがどれくらい正確なのか、また子どもたちの日常の状況と個々の記憶との関連を確認するため、（１）の協力者の母親を対象に、インタビューと質問紙調査を実施した。

（３）探索的に、母親自身の語りのデータもと取り、子どもと比較することを行った。また、子どもとのデータとは別に、子どもにおける語りと記憶内容のデータと将来的に比較することを念頭に、成人を対象に、語りの際にどういった部分を重視するのか、どういった内容を語るのかに関する予備的な調査も検討してきた。

（４）エピソード・自伝的記憶にどのような認識が関係するかを検討するため、思い出や経験に関する評価、日常的な経験や認識、また、語りの違いや重視する部分を探る、質問紙調査を探索的に行ってきた。

4. 研究成果

（１）エピソード・自伝的記憶の発達過程において、個人間で共通する、複数の重要な時期が存在することを示した。その成果の一部

については、国内の学会で報告した（上原、2008）。

（2）幼児期初期の過去のエピソードの「語り」は、幼児期後期以降になると、明らかに変わってくる様子が確認された。表面的な断片的な「語り」から、成人でみられるような（成人ほど精巧とはいえないものの）自伝的記憶としての語り（ナラティブ）へと、徐々に変化していく可能性が示唆された。この部分の変化の過程については、英語を母語とする子どもの語りの発達過程（例えば、Fivush, Haden, & Adam, 1995）と類似している可能性が高いことがわかった。この結果の一部については、国際学会で発表した（Uehara, 2007）。

（3）縦断的調査の結果分析を通じて、エピソード記憶の内容や語りに関して、複数の個人間で共通してみられる、生じやすい変化のパターンが存在する可能性が示された。その成果の一部については、国内の学会で発表した（上原、2009a）。詳細の分類等の分析が今後の課題である。

（4）本調査で中心的に追究してきたエピソード・自伝的記憶以外の記憶発達研究（短期／長期記憶、ワーキングメモリ、他の日常的な記憶）との関連も視野に入れて、記憶全般の発達過程と自伝的記憶の発達過程の関係性を、本研究が蓄積してきた縦断的データの分析結果を過去の国内外の知見に照らしあわせながら、比較検討し全体像について考察した。これらの比較検討と考察については、新たな解釈も含めて論文にまとめ、国内の論文集に発表した（上原、2009b）。

（5）子どもにおける自伝的記憶の語りがどのようにその後、発達していくのかを探るため、成人の語りに関する調査も予備的に検討してきた。一部、成人における語りの文化差や内容差に関するデータを得て中間報告を行ったが（上原、2010；上原、東、2007）、内容的に子どものデータと比較しうるだけの十分な成果として、学会や論文に公表できる段階には至らなかった。子どもと成人における語りや記憶内容の違いや、子ども期から成人期へのつながりに関するデータを確実に積み重ねていくことで、長期の変化の過程がみえてくる可能性が高く、今後の課題といえる。

（6）本調査で収集したデータを、メタ認知（自己の認知活動に対する客観的に認識すること）の発達という視点からのデータの解釈も試みた。4歳前後のエピソード・自伝的記憶の発達とあわせて、メタ認知的な内的モ

ニタリング能力の発達がすすみ、5歳以降に発達が著しいとされる、方略的な面を中心とするメタ認知能力の発達につながっていく可能性も示唆された。ただし、年齢、内容ともに、もう少し広範囲な認知能力のデータに基づく検討が必要であり、それらの発達過程の詳細のメカニズムの追究は将来的な課題である。なお、この検討内容の一部については、国内の学会で報告した（上原、2010）。

（7）エピソード・自伝的記憶の発達の発達の一部には、複数の子ども間で共通性がある一方で、内容そのものや個々の自伝的記憶の内容量、語られる量には個人差があること、さらに同じ個人内でも、個々のエピソードレベルでは、量、質ともに差があり、全体として、その長期的な変化の過程は多様であることが示唆された。その成果の一部については発表した（上原、2008a、2008b）が、さらなるデータの蓄積と分析が将来的な課題である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 上原泉、知的障害者における快-不快感情を伴う自伝的記憶—予備的検討—、東京外国語大学論集、査読無、第81号、2010年、pp. 435-446。
- ② 上原泉、子どもの記憶、日本児童研究所編（金子書房）、「児童心理学の進歩」、査読有、Vol. 48（2009年版）、2009年、pp. 111-134。
- ③ 上原泉、幼少期の自伝的記憶研究の課題—岩田論文へのコメント—、心理学評論、査読有、51巻1号、2008年、pp. 37-42。
- ④ 上原泉、東洋、日本・中国・米国の学生が重視する主人公の特徴—中間報告—、発達研究、査読無、21巻、2007年、pp. 55-68。

〔学会発表〕（計4件）

- ① 上原泉、メタ記憶の発達に関わる要因—初期の記憶と言語発達の視点から—、ワークショップ「認知的メタプロセスの進化と発達」（藤田和生企画）内、日本心理学会第74回大会、2010年9月、大阪大学（大阪）。
- ② 上原泉、幼少期の出来事に関する語りはどう変化するか—事例研究の中間報告—、日本心理学会第73回大会、2009年8月、立命館大学（京都）。
- ③ 上原泉、自伝的記憶が形成される時期の検討：幼少期の過去の語りとその変遷過

程、リレー講演「自伝的記憶の発達」(大会主催:石王敦子・落合正行 企画)内、日本発達心理学会第19回大会、2008年3月、大阪国際会議場(大阪)。

- ④ Uehara, I., The relationship between ages of personal experience and later recall during childhood: an examination by longitudinal case studies, Paper presented at the XIIIth European Conference on Developmental Psychology, August 22nd, 2007, Jena, Germany.

[図書] (計3件)

- ⑤ 上原泉、北大路書房、第I部「自伝的記憶研究の方法」、4章 自伝的記憶の発達と縦断的研究、佐藤浩一・越智啓太・下島裕美(編著) 自伝的記憶の心理学、2008年、pp. 47-58。
- ⑥ 上原泉、金子書房、第I部「私が生まれるところ」、2章 思い出の始まり—初期のエピソード、仲真紀子(編著) シリーズ:自己心理学、第4巻:認知心理学へのアプローチ、2008年、pp. 30-46。
- ⑦ 上原泉、北大路書房、第1部「乳・幼児の記憶」、2章 短期記憶・ワーキングメモリ (Pp. 21-30)、3章 エピソード記憶・意味記憶 (Pp. 31-37)、太田信夫・多鹿秀継(編) 記憶の生涯発達心理学、2008年、pp. 21-37。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上原 泉 (UEHARA IZUMI)

東京外国語大学大学院総合国際学研究所

院・准教授

研究者番号: 80373059